

三 宿善の春

まめな体なら何がどこへあたって痛くでもない。手や足に少々物がふれたとて何ともない。しかし病気にしているところや傷をしたところだと一寸さわられても飛び上るほど痛い。つまり刺激に対して敏感なのは病があるからである。少々寒くても平気で風邪など引いたことがない、暑さの中で終日裸体で働いても平気、こんなに鈍感なのは肉体が丈夫なのである。しかるに私の体は至って敏感である。少し寒くなると風邪を引いて待ち、重いものを持つと心臓という釜の湯がにえたぎって苦しくなる。つまり病体なのである。

心はどうか。「腫れ物にあたる」ということは痛いことの代表にされているが、一口でも人が悪いことをいえば、飛び上る程痛いのは心が腫れ物だからである。我慢の鬱血、三毒の体血、八万四千の無明のバクテリア、それが慢性になつていて、一寸さわられても「痛い」。時にはさすられても「痛い」。病気の証拠である。

悪いことには敏感でも、よいことには鈍感である。悪口を一口でも聞かされたら、一晚中体を立てて眠られないのに、御法のことになると眠たくなる。なぜだろう、智土がないからである。無明の病が重いからだ。国家も脈搏二千億円を超える高熱患者、社会もドロボウ横行、ヤミ繁昌の重態、個人も善悪の口論上手な混乱狂態、しめて地獄の五濁悪世。今更に宗教を失つて、神風という迷信に走つた国家の末路の哀れなる哉。東京を見よ、東京を見よ。名利餓鬼の代表者のあの狂態を。

仏実は大医王、法実は醍醐の妙薬、僧実、菩薩は看護人、入院だ入院だ。入院して心を安んじ身を養うこと、弥陀の浄土を安養といわれる。五濁悪世にいる間は病人と心得て、正法の薬を召せ。病の根は一念に切れても、この世にいる間は病人である。お母さんが子を生むと、喜びに来た人は「まめに生まれましたそうで」というのにお母さんは、まめになつてから床につく。光明の母、名号の父、因縁和合して信心の子が生れたら、光明名号の父母はこの子を棄てずに育てて下さる。

この世は病院、私は病人、大手術を受けて即得往生住不退転、病はだんだん快くなるが退院は死んで浄土へ行った時だぞ。いいか、わかつたか。ゆめゆめ健康のまねをすまいぞ。

沈黙は金、念仏は如意実珠。ベラベラしゃべることからが病人の自覚のない証拠。

「仏法は讚嘆談合に極まる。よくよく讚嘆すべし」(蓮師) お互いに集つて讚嘆すると一、聴聞の誤りを知る。二、未聞の法を聞く。三、いよいよ明了堅固となる。四、報謝の情を増す。五、お互ひに心中を知る。六、懈怠の改まる縁となる。七、教人信となる。これが先哲の教えた讚嘆の七徳である。前の六条が自信、後の一条が教人信、つまり自信教人信の増上縁が讚嘆である。

仏法の集りに出ても感想がない。それは信がないのである。感想のないような生活は空転空過したのである。念仏の耳を傾け、眼を見はれ、感想は何時でも山ほど生れる。

ちつぽけな我が、ちつぽけな自力にとらわれて、我利々々根性を通すために、どんなことをしても駄目だ。大学を出ても博士になっても、後になれば残るものは愚痴一つ。若人よ、富士の山のような大鉄槌でそのちつぽけな自力我慢を打ちくだいてもらえ。無我の大信がそこに生れる。この信のみが無為自然の浄土から、願力自然のみ親から、廻向されたる唯一絶対の金剛心である。若人よ、念仏して心を常人の考え及ばざる世界に樹てて生きぬけ。

唯聞、唯信、唯称、話にすれば三つになる。しかし事実によれば一つである。真に聞くとは信ずること。聞きもせずして信心をつくね上げようとしてもそれは徒勞である。聞け。とにかく聞け。徹底的に聞け。聞いたままが信心となる。聞いても信とならねば唯聞ではない。信じたはずでも聞其名号がぬけていたら信ではなくて独断である。

一度信心成就したら念仏となる。なぜならば「弥陀の本願と申すは名号を称へん者をば極楽へ迎へんと誓はせ給ひたる（誓願）を深く信じ称ふるがめでたきことにて候ふなり。」（末燈抄）誓願にすでに念仏申させると誓われているのである。称えるものを助けるの本願である。易行を誓って極難信を發起せしめたものである。易行は大慈悲のあらわれである。

そこで唯聞のままが唯信、唯信のままが唯称三即一の絶対他力。これ即ち自然法爾の大信大行不二不離の妙趣である。唯聞のままが唯称、たゞ念仏する、それですべて解決、そこに唯信の天地がある。我が聖人が唯信独達を強調されるのは、聞と称とを信に摂めて、涅槃之城以信為能入との師教を領解し、本願成就文の信心歓喜の文に对应せられたからである。唯聞唯信唯称の三即一がよくわかるなら、善導法然の如く唯称で出してもよければ、大経の其仏本願力聞名欲往生と、唯聞を出しても結構である。歎異抄二章の「親鸞におきては、唯念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」という御文を頂くと、「唯」が「念仏して」にかかって唯称を示し、唯「弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せを被りて」と唯聞を明かし、唯「信ずるほかに別の子細なきなり」と唯信が現わされている。この文には、初めに「唯」おわりに「ほかに子細なきなり」と全てを受取つて唯一の義が明されてある。三つが渾然として融合した信の表白である。

自力がものをいうと、この三つが三つにバラバラと空中分解をやつて、何もなくなる。聞きながら心が聞かず、称えながら信心をさがす、信じたと言いなながら念仏が出ない。願往生と無碍広大の虚空が飛べるものか。ナンマンダ仏と称えるままで万事

解決。「称ふればうらみくやみの雲晴れて　むねには残る信心の月」「念仏者ほ無礙の
一道なり」とはこのことか。

今日あたりすつかり暖くなつて玄關の梅もほころびはじめた。自力では花べんの
一片さへ開かない。宿善の春。世は春だ。
(二三、二、一七)